

〔大和文華館名品展によせて〕

金貝蒔絵野々宮文棗(嵯峨棗)をめぐる

薄茶を容れる棗の中で、枝垂れ桜・柳・藤などの模様を蒔絵した粗相な町棗の一群は嵯峨棗と呼ばれています。漆は塗った後に研ぎ出さず、蒔絵に用いられる金粉は純度が低いなど、簡素な作りですが、楚々とした風情があり、茶人たちに好まれてきました。嵯峨棗は嵯峨嵐山の土産物であったという説や、嵯峨に別荘のあった角倉素庵が指導したという説などがありますが、その名称の由来や産地などについて確かなことは分かっていません。嵯峨棗の箱書に、武者小路千家二代文叔(万治元年～宝永5年/1658～1708)が「サカ棗」と記しているものがあることから、17世紀末頃には嵯峨棗という呼称が使用されていたことが窺えます。

無名の職工によって作られた嵯峨棗は制作年が確かな基準作がなく、その変遷を辿るのは難しいですが、嵯峨棗に描かれる枝垂れ桜や藤などの模様と、寛文年間(1661～72)から正徳年間(1711～15)にかけて刊行された雛形の小袖模様が類似することが指摘されており、この頃が嵯峨棗の隆盛期なのではないかと推察されます。

大和文華館は嵯峨棗に分類される棗を四点所蔵していますが、材や塗り、蒔絵の施し方、模様の表し方は一様ではなく、作られた時代や工房に幅があることが感じられます。今回は、四点の中の「金貝蒔絵野々宮文棗」(図1～3、

以下本作と略称)に注目したいと思います。本作の漆の塗りにはムラがあり、研磨されておらず、漆の色はやや透明感のある鉛色となっています。側面には鳥居が大きく表され、藤の木が鳥居に巻き付きながら蔓を伸ばし、優美な長い花房を垂らしています。鳥居の傍らには大きな杉の木が一本立ち、曲線の多い藤とは対照的に、幹や枝・葉が直線的に表現されています。藤や杉の葉は金蒔絵で、鳥居には大きな杉の木が一本立ち、曲線の多い藤とは対照的に、幹や枝・葉が直線的に表現されています。藤や杉の葉は金蒔絵で、鳥居には大きな杉の木が一本立ち、曲線の多い藤とは対照的に、幹や枝・葉が直線的に表現されています。

藤は嵯峨棗の模様としてとても好まれた花です。同じく嵯峨棗である「蒔絵藤市松文棗」(部分、図4、大和文華館蔵)の藤は葉脈が針描きで表され、花は歪な楕円形で表されるのに対し、本作の藤の葉は描割で表され、花も描割によって花卉の中心に縦線を入れることで花卉を二つに分けており、上一枚と下四枚から成る藤の花の構造を、簡潔ではありますがありつつもしっかりと反映しています(図3)。蓼も省略せずに描いており、比較的丁寧な表現がなされています。嵯峨棗の藤は花籠や市松文、藤棚などと組み合わせられることが多く、本作のように鳥居と共に描かれるものは大変珍しいです。本作の鳥居がどの神社の鳥居を表したものかについて

は二つの説があります。一つは京都・野々宮神社の鳥居とするもの。敢えて金蒔絵でなく鈍い灰色を呈する鉛を鳥居に用いていることから、野々宮の有名な黒木の鳥居を表していると考えられており、本作の箱には「野々宮棗」と記された紙が貼られています。野々宮は斎宮が精進潔斎のために籠もる場ですが、『源氏物語』賢木のかたに籠もった六条御息所の別れの場としても知られています。娘の斎宮と共に伊勢に向うことを決意し、野々宮へ潔斎のために籠もった六条御息所のもとへ源氏が秋の野辺を分け入り訪れ、常緑の榊の枝を差し入れ、変わらぬ心から会いに来たことを和歌で伝え、別れを惜しみます。本作の鳥居が野々宮神社のものとすると、嵯峨棗に嵯峨の名所である野々宮や源氏物語の世界を重ねた趣深さが感じられます。

その一方で、鳥居と共に描かれる杉や藤は野々宮の名物ではありません。『源氏物語』の野々宮の場面に登場する主要な植物は源氏が六条御息所に贈った榊や、源氏が分け入った秋の草花であり、杉や藤ではありません。杉や藤が有名な神社と言えば、すぐに名前が浮かぶのは奈良の春日大社です。春日大社は藤原氏の氏神であることから、藤が社紋となっており、境内には藤が多く見られます。また、春日大社や春日山の杉も古くから有名です。数多くの嵯峨棗を調査した池田巖氏は、本作と同じく金貝を用いて鳥居を表し、杉や鹿が共に描かれている作例(図5)を紹介され、どちらの棗も春日大社を表している可能性を指摘されています。本作で用いられる鉛は黒色を表現するため

はなく、金蒔絵の中に映える素材として選ばれたのかもしれませんが。

現在でも春日大社には多くの藤の木があり、また「藤鳥居」と呼ばれる鳥居も残されています。今は藤鳥居に藤はありませんが、昔は鳥居に藤の木が巻き付き多くの花を咲かせたことからこの名のついたことが『南都名所集』(延宝3年/1675刊)に記されており、藤鳥居の様子を表す挿絵(図6)や和歌も紹介されています。野々宮神社、春日大社、いずれの神社であれ、藤に鳥居を組み合わせた本作は、和歌や物語の世界を連想させる情緒ある作品となっています。嵯峨棗らしい粗相な作りではありますが、前述のように蒔絵は比較的細やかに表されており、模様の取り合わせにも趣向が凝らされているなど、嵯峨棗の展開の一つとして興味深い作品です。(宮崎もも)

※図5は池田巖『嵯峨棗』(淡交社、2003年)、図6は『日本名所風俗図会9』(角川書店、1984年)より複写致しました。

図6



図1



図2



図3(図1の部分)

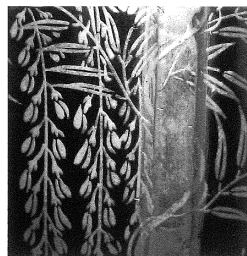


図4



図5



季刊 美のたより No.178

平成24年4月15日

発行 大和文華館